

「幸吉の旅」



五

丁度、その時、加藤のお鎌さんは、窓を離れて隣の室に、毛糸のひとかせを取りにいつたところだったので、玄關で案内を乞ふ音に應じて、戸を開けた。開けて見て、まるで、そこに吸ひ付けられたやうに、物も言はずにおつ立つてゐた。先祖の幽霊が現はれて、玄關先に、立ち並んだつてかうも驚きはしなかつたかも知れない。

幸吉は、さつ！と帽子を脱つた。彼は、お鎌さんが、窓の許で、編物をしてゐた時に、その顔をはつきり観なかつたので、もし、観たのだつたら

東京女子高等師範
學案教授 岡田 みつ

とても案内を乞ふ氣にはならなかつたらう。でも、今となつては、もう仕方がなかつた。お鎌さんの冷やかな眼を、ぢつと見詰めて、幸吉は雄々しく、だが、慄へた聲で、

「あのう、このお家で、赤ちゃんは要りませんか。」

と尋ねた。(赤ちゃんが要るかつて！ 何といふ、馬鹿氣た、折に合はない言葉だ！ 赤ちゃんといふものが、例へば、人が生きてるのに入用な空氣かなんぞのように、無くてならない物ではあるまいし！)

お鎌は、返事をしなかつた。彼女は、この場の

有様を説明する何か手掛りがありさうなものだと無理にも心を落ちつけて、考へようとしてゐた。

幸吉は、この婦人は、この家の主婦ではないのだと推定して、庭にあつた大理石の名札（墓石のこと）を幸吉は名札だと思つてゐたので）のことを思ひ出して、

「加藤まさ子といふ人は、この家に居ますか。」と言つてみた。（まあ幸吉つたら！ 何だつて、此の大事な場合に、お鎌さんの心の、痛い所に觸れる氣になつたのだらう！）

「何の用なの。」とお鎌は、吃るやうに言つた。

「僕、誰か この赤ちゃんを貰つてくれる人が欲しいんです。小母さんところに、赤ちゃんが無ければ、ネ、小母さん、こんな可愛い、奇麗な子は、よそにありませんよ。それに冬になれば、雀斑も、さう出来ませんしネ。僕を貰つてくれなかつたつて構はないんです。赤ちゃんの世話をす

る手傳ひに、僕が入用なら、居ますけれど。」

「折角だけれど」とお鎌は、玄關の戸を閉めさうにしながらあてつけがましく考へた。「今日は、赤ちゃんを貰ひたくないから、まあ、御断りしますお前さんだつて、お母さんとこへ早く歸つたら宜いだらう——お母さんがあるンなら、そうして何處に居るンだか分つてるなら。」

「でも、僕の母さん——無いんです。」と幸吉は、あてにしてゐた願ひが叶はなくなつたので、思はず悲しくなつて、泣き出してしまつた。この子はいくら、偉いつたつて やつぱり まだ子供なのだつたから。

その途端に、菊嬢が眼を覺まして、幸吉が泣いてゐるなんていふ珍らしい光景を見て、これもワツ！と泣き出した。すると、ポチまでが——なか／＼敏感で、いつもお附合ひに泣く心掛けがある犬なので——毛むくぢやらの頭を振り上げて、泣

きの合奏に加はつて、悲しげな聲をはり揚げた。
さながら、一幅の活人畫が出来たわけだつた。

「お崎や！ お崎！ すぐこゝへ来て、どうかして
おくれ！」とお鎌さんが呼び立てた。

呼ばれた女は、縁側から飛んで来た——後ろに
赤や、黄や、青の小切れを、長蛇のやうに曳きつ
つて。

「あれ、まア」と幸吉の一まきを見渡して、

「一體、どこから来たんだらう。そして、どうし
ようつていふんだらう。」とその女は言つた。

「この男の子は、赤坊賣らしいんだよ。この赤
ツ毛の赤ン坊を、貰つてくれつていふのさ。だけ
ど自分まで貰ふに及ばないつて。どうも家庭が無
いと見えるよ。それでね、私が、今赤ン坊は要ら
ないんだつて言つたら、それを聞いて泣き出した
の。さうしたら、あとのが真似して泣き出したの
さ。この子達は、犬と一緒に 養育院からでも逃

げて来たのかね。精神病者にしては あんまり小
いだらう？」

幸吉は、菊嬢を賺して、よい顔をさせたいばか
りに、自分の涙を納めて、後悔したやうに、

「僕つひ泣いちやつて。だつて菊ちゃん、昨夜
ツから御煎餅をたべたざりて、何も食べてゐない
し、小母さんが明朝まで泊めてくれなければ、寝
るところもないんですもの。僕たち、よその家を見
んな通り越して、こゝのお家にさめたの。何もか
も思つた通りのお家だから。」

「お煎餅ツさき食べないんだつて、まあ！」とお
崎は叫んで臺所の方へ往きかけた。

「こゝに居ておくれお崎！ 私一人こゝに置いて
いつてはいけないよ。近所の人がやつて来て困
るしさ。この子供達を臺所へ連れていつて、何か
食べさせて ちやり。あとの事は、それからにし
よう。」

菊嬢は、何か食べるのだと聞いて上元氣になり籠の中から這ひ出ようとして、縁から轉倒げ落ち石段でひどく頭部を打つた。お鎌さんは、兩手で顔をふさいで、子供の泣く聲が起ることゝ身慄ひして、待つてゐた——子供の肉色の靴下と、赤毛の頭部とが中空でこんぐらがつてゐるのが見えたので、併し、菊嬢は、どうやら一人で起き直つて、アハ、と反響するほどの笑聲——世にも賑やかな笑ひ聲を立てゝ笑つた。あ、今のは可笑しかつたと彼女は思つたのだ。かの女の身體には笑ひが一杯入つてゐた——毎日／＼新に材料を仕込むものだから。菊嬢のやうな性質には、「不幸」なんていふものも長く威力をもつ事は出来ないのだつた。菊嬢はお崎に手を曳かれながら「お飯！ お飯」といつて、それから、「あのいやな小母さんは來ないでいよ。」と附け足したが、幸ひにも、解りにくい片言でいつたた

め聞き取れないで終つたのだつた。

お鎌さんは、暗くしてある居間に、よろめき入つて、その黒い長椅子に、身を下ろした。お崎は、陽氣な臺所に、子供達を連れ込んで、

「驚いたね！ ひとりで諸方歩きまはつてさ。大人人の膝位しか背がないのに。この夏は、あんな子供の乞食を澤山稼ぎに出してるのかしら。だが、この家へ來た以上、お腹をすかしては歸さない！」とひとりでぶつ／＼言つてゐた。

さういふわけで、お崎は、パンだのバターだの、バイだの、ミルクだのを多量出して子供達にお腹一ぱいお食べといひ置いてそれからつぶし肉をブリキ皿に入れて物置小屋へもつて行き、ポチを箒で掃き出してそこへ押し入れてからお鎌のゐる室へいつた。

「あなた、何だつて さう怖さうにしてゐるんです。乞食を今まで見た事がないんですか。どうし

たのですよ——私一人で始末が出来ないって 案じていらつしやるのなら、彌平ぢいさんが、やがて戻つて來ますからね。爺さんとお玉は、(馬の名)床に入つて寝るンだと思ふと急ぐ氣になるので、今頃は、さう思つてゐる頃でせう。」

「お崎や、今の男の子がね、眞先まっせんに加藤まさ子さんはこの家に居ますかつて訊いたよ。一體どうしたわけだらう？」

お崎も、すつかり仰天してしまつて、

「加藤まさ子がこの家に居るかつて？ どうしてまさ子ツて名を知つてるのでせう。きつと誰かといふ言つて尋ねろツて教へたのですね。そんな事ですよ。別にどうでもないぢやありませんか」「ひア、どうだかね。あの子が私の顔を見て加藤まさ子さんと言つたら、その途端に、もう心の奥にひそまつてゐて出て來ないだらうと思つてゐた悲しさが、頭を もたげて、まるで昨日の事み

たやうに、私や悲しくなつて來て……

「ま、落ち着きなさいませ。何事もありはしませんよ。」

「でもね。ひよいと、こんな考が出たのだよ。」といつてお鎌は聲をひそめて、

「まさ子の赤ン坊は、ほんとは死んだんぢやないかもしれぬネ。」

「だつてまあ？ 假りに死なゝかつたとしても、まさ子さんが死んでから 二十年の上になりますよ。」

「それは知つてるけれど。その赤ン坊が大きくなつて、今來たやうな子供を置いていつてさ、そしてその子があゝして、たつた一人で世界中を、うろついてゐるのかも知れない。」

「あなた、まあ、随分細かく想像してゐるのですね。もう、いろ／＼考へるのはお止しなさい。まるで、夏、こゝへ避暑に來るお客が讀んでゐる、

安小説みたやうな事を考へていらつしやる。あんな本にはこゝら邊にも、どこの國にも 實際にはありさうもない事件一杯かいてありますね。すこし横になつて 樟腦でも嗅いでいらつしやい。私、あの男の子から きゝ出せるだけいろ／＼聞いて來ますから。」

.....

加藤のお鎌さんは、本質的に、獨身者もものに出來上あがつて居たが、お崎は、運が悪るために 獨りものなのだつた。お崎は、今まで滅多に 子供の可愛い、仕草や、言葉に 接しなかつたのだが、もし、接する機會があつたら、この女は 子供といふものは、たまらなく、可愛いくて、離れられないものだ、と思つたことだらう。

お崎が、臺所へ子供達を連れて行つた時は、敵を絶滅しようと、意氣込んでゐる將軍のやうであつたが、三十分後に臺所から出て來た時には、そ

の覺悟がいつとなしにどこかへ去つてしまつてゐた。かの女は臺所へ入つた時には、たゞ一つ 思ひ込んだ目的を持つてゐた女だつたのに、出て來た時は、二心ある外交家になりすまして、煽動と陰謀を、人知れず、その心にひそませてゐた。どうして、さうなつたらうツて？ たゞ軽い何でもない原因が、五つ六つあつたせいなのだつた。まづ幸吉が、お崎の足許の、小さな腰掛に坐つて、お崎の膝に 兩腕をかけ、その澄んだ湖水のやうな眼（幸吉の魂の窓とも云へる）で、お崎の、優しい丈夫さうな顔をじつと見たのが始まりだつた。それから、彼が 身の上話をしてきかせたのだつた。身の上といつても、ぼんやりした、影のやうな、愚痴なんか少しも混らない、談片で、始まなければ、趣向もないし、また終りもないものであつた。それでも、その一語一語が お崎の胸を轟かせたのだつた。

菊嬢は 好きなものを 目敏く知る子なので、早速、お崎の寛い膝ひざの上に攀よち登のぼつてみた。ところが、邪魔にもされなかつたので、お崎の胸のあたりの心地よい凹みに、頭を、ぴつたりはめ込んでしまった。すると、お崎は、子供の柔かい身體からだを抱へてしまつて、そして、いつのまにか、掛けてゐた椅子を ギユ、ギユ、ギユと 前後に ゆすぶるように なつてしまつた！

菊嬢は、世にも満足したといふ風に 大きい溜息を一つして、可愛い、眼を塞ふさいでしまつた。この子は、可愛いがられるのが好きに生れて來たのに、今までは さうした經驗に あまり出遇つてゐなかつたのだ。お崎はその嬉しさを溜息をさゝ、その花のやうな幼ない顔を見、丸つこい腕うでで柔かく、首の邊りにつかまられてみると、何故かは知らないが、心の中に以前の思出や、新たな憧憬が湧き上るのだつた。要するに、お崎は 敵に出

會つて、すつかり捕虜とりこにされてしまつた次第ついでだつた。

やがて、お崎は、菊嬢を、古めかしい長椅子に寝かして、自分は、その傍に陣を取つて、棕櫚せうりの葉の團扇うちやうせんで、蠅はを追拂つてやつてゐた。かの女は幸吉から その不幸な過去、不安な現在、殊に當てのないかれの未來の事を 聞き終つた末、次のやうに言ひ出した。

「もう一つ きゝたい事があるんだよ。それはね お前が 初め、玄關へ來た時に、何だつて、加藏かざうまさ子さんはつて尋ねたの？」

「僕、こゝの家のちかみさんの名だと思つたから。名札にさう書いてありましたよ。」

「だつて、お前、こゝの家には、第一、名札が出てゐないよ。」

「都會まちにある、あの銀色をした、あんなのぢやないけれど、お庭にある白い一理石の板は、名札で

せう？ 加藤まさ子、十七歳 と書いてあつたつ
け。田舎では、庭に、名札を立て、たくのかと思
つたんです。たゞね、年齢としを書いて於くのが變だ
なと思つたの。時々、判つて改たはさなくツちやなり
ませんものね。」

「まあ！ この子は！ お墓を知らないの？」と
お崎は絶叫した。

「お墓つて何？」

「まあ！ 一體、お前の知つてゐる事は何だら
う！ 人が埋めてある墓場を見た事ないのかへ？」

「僕は、墓場へ行つた事はないけれど、そのあ
る所を知つてゐます。人が埋められるのも知つて
ゐます。お房は埋められることになつてゐまし
た。ぢや、あの白い石は、人が中に埋まつてゐて、
何ていふ人だつて事が書いてあるンです。する
と、やつぱり、名札みたいなもンでせう？ 加藤
まさ子、十七歳ツて誰ですか。」

「その人はね、お鎌さんの妹で、都會まちへ行つて、
それから、この田舎へ歸つて来て、昔死んぢまつ
たの。お鎌さんは、まささんを大事に思つてゐて
ね、人がその名をいつてもいやがりなざるから、
よく覺えてゐいでよ。——そのお房さんといふ人
は、若い人だつたの？」

「若いか、どうだの、僕には分らない。」と幸吉は
當惑して「黄色いような髪で、白い齒をしてゐた
けれど、咽喉のどのところは、この小母さんみたいに
皮がぱり／＼だつた。菊ちゃんみたいに柔なでな
かつたな。」

「まあ、いゝサ。では、暫くここにゐいでよ。そ
してあの犬が引搔くのを止さない内は中へ入れち
やいけないよ——一生引搔いてゐてもかまはない
から。あの犬は行儀がわるくてしょうがない。こ
れから私は、お鎌さんとこへいつて、話して来る
から。お前達を一晚泊めてやると言ひなざるか、

「どうだか、さつぱり私には分らない。お前、はじめの「出」がわるかつたんだもの。」

六

お崎は、お鎌の居間に入つていつて、幸吉にきいた話を、すつかり話した。この女は、言葉を飾つて話すたちでないから、簡単に、あつさりと話して、お鎌の返事を待つた。

「どうしたもんだらうね。」とお鎌さんは、心配らしく、尋ねて。

「どうも、私が指圖するわけには行きませぬ。私のおぢやないし、寢台だつて、食べ物だつて、私のものでないから、でもね、神信心をしてゐながら、あの子供達を、追出すなんて、無慈悲な事は出来ませぬ。かうして、暗くはなつてくるし、あの子達は寝るところはないしするのですから。」

「うちのまさ子が、悲しい目に遇つてた頃に、立

派な信心家が、かまひ付けてやらなかつたよ」

「それア、信心家にだつて、無情者こころをなしはありますけれど。それだからつて、私達が、その眞似をするには當らないでせう。」

「知りもしない子供を二人も引受けて、幾日も、いや一月も二月も、背負ひ込む等はない。」とお鎌さんは冷淡にいつて「ぢや、かうしよう。男の子を、植田さんへ遣らう。草刈りの時節に近いから雇ひ入れて何かの手傳ひをさせるかも知れない。さうして、あの子には、この近所で働く口があるなら、赤ん坊だけは預つてやると言はう。その内に、あの子達を遣る場所を見附けたり、その言ふことが、眞實だか、どうだか、探さぐり出すことも出来るから。」

「で、もし植田さんで、雇はないツて言ひなすつたら？」

と、お崎は、なるだけ、無頓着な態ていを装つて、尋

ねた。

一さうしたら、こゝへ戻つて来て、こゝに泊るよ
り、しようがないぢやないか。私がいつてさう言
つてやりませう。私や、何だか、長く病氣に罹つ
てたあと見たやうに、力が無くて。」

幸吉は、お崎が心配した程でもなく、おとなし
く承知した。植田さんの農場は、さう遠くもなさ
うだし、菊嬢の事は、案じないでもよくなつた
し、自分だけなら、どこかに寝るところはあるだ
らう。養育院とか何とか院なんて家でさへなけれ
ば、どこだつていゝ。と、幸吉は考へたのだつた。

幸吉が帽子を手にして出掛けようとした時に、
お鎌さんは、氣がゝりらしく、

「赤ん坊が、目を覺まして、お前が居ないのを知
つたら、どうするだらうね。」と訊いた。

「僕にもよく分らない。」と幸吉は答へた。「今まで
は、いつも一緒に居ましたから。だけど、大概大

丈夫でせう。小母さんに少し馴れてゐるし、僕が
毎日遇ひに来れば、菊ちやんは、滅多に泣きませ
んよ。どうかして癩癩を起すと、たまに泣くけ
れど。でも、こつちで、氣を付けてチャンとして
ぬれば、怒つたりしません。」

お鎌さんは、お崎の方を凄いやうな眼で、ちら
と見て

「フーン、赤ん坊の方がチャンとしてゐる筈ぢや
ないか」と言つた。

幸吉は、野を斜にすに植田さんの家へ、行く途を教
はつた。お崎は、裏門まで、幸吉について行つて
ソツと、ドウナツを三つ渡してやつた。表面は、
草地に干してあつた、手拭や、ナフキンを取り入
れる風にして、幸吉の姿が見えなくなるまで、見
送つてゐた。

.....

その晩、九時頃に、もう眞暗まっくらになつてから、幸

吉は、こつそり加藤の家の門のところへやつて来た。植田さんの家へ、いそぐ、と十町あまりも歩いていった。その足を、彼は大儀さうに、曳きづつて戻つて来たのだつた。「望み」といふ鞋を穿いて歩くのと、「失望」といふ重い靴を曳きづつて歩くのとは、大層な相違だつたから。

幸吉は、白い小門に倚りかゝつて、蛙の聲を聴いたり、草の中で、あちらこちらに、光つてゐる螢を眺めたりしてゐたが、靜かに、家の横手に廻つて、お崎に取りなして貰つて、あの怖い小母さんの前へ出ようと考へたのだつた。彼は、音をさせないように、戸をあけて入つた。すると、困つたことに、その怖いお鎌さんが。そのの卓の上に洗濯したものをひろげて、水をふりかけてゐた。

ちよつとの間、雙方無言でゐた。それから幸吉は卒直に

「あすこの家で、僕を雇つてくれませんか。ま

だ小さくて役に立たないッて。菊ちゃんを要らないッて言ふんです。僕、もうひとに厄介をかけないでこの長椅子に寝る方がいいと思ふ。」と言つた。

「そんな事しないでもいいよ。」とお鎌さんは、威勢よく應じて、「よく歸つて来ておくれだ。泊り賃位、すぐ稼げる。ソレ、あの聲がさこえるならう。」といつて、二階に通じる廊下の戸を開けた。

なるほど、泣き叫ぶ聲が、臺所まで傳はつて来た。續いて、また、一と聲、次にまた一と聲！ 幸吉の身體中の血が、のこらず、その青白い顔に昇つて来た。彼は、口をキリツと結んで

「菊ちゃんが打擲たれてゐるのですか。」と訊いた。「いゝえ。打つてやつてもいゝ位なんだけれど、私達はそんな亂暴はしないよ。あの子は、お前が言つた通り、疳癩持ちなんだね。大方こつちがチヤンとしなかつたんだらうよ。」

「僕、行つて見てようござんすか。僕の顔を見れば、黙(だま)んでせう。あの子が寝るとき僕が居ない事がないもんだから。あの子はほんとにちつとも、怒りほくないんです。」

「いゝとも〜。あの子がこゝに居る間は、お前も居てもらはう。ほんとにまあ！ 近所の人は、うちで豚を殺してゐると思ふだらう。」

と言ひながら、お鎌さんは、先へ立つて、幸吉を二階へ案内していつた。

菊嬢は、床(こゝろ)の上に起き上つてゐて、子煩惱のお崎が、傍(かたわら)に坐つて、林檎(りんご)だの、お菓子だの、繪入りの聖書だの、寒暖計だの、玉蜀黍(とうもろこし)の穂だの、剝製にした青い鳥(お客間の飾棚の誇りなのだが)を膝に擴げてゐた。

しかし、そんな御機嫌とりの品物は、何の効力もなかつた。いくら宥め賺さうとしても、菊嬢は「兄ちゃん！ 兄ちゃん！」といつて訴へるばかりだつた。

そこで、今、なつかしい幸吉の姿を見ると、かの女は貴重な鳥を、室の隅へと放り投げて、狂喜して、幸吉の腕に縋りついてしまつた。

それから十五分経つたら、四邊(あたり)が森(しん)としてしまつた。お崎は、居間へ入つて、揺り椅子にどかりと腰を下ろして

「あ！ すつかり上氣(お)せてしまつた。」と言ひ〜前掛で顔を拭いたり、扇(あふ)いだりした。

「夕方、五時ごろには、私も、太一郎さんところへ嫁(よめ)かなかつたのを残念だと思つたけれど、今は、嫁(よめ)かないでよかつたと思ふ。だけれど、(青い鳥の羽毛(はね)が)もしや〜になつたのを、撫(な)で、平らにして、硝子箱の中へ戻しながら)子供は、可愛い〜。」

「子供にも、まるで野良猫みたようなのがゐる。」

とお鎌さんは、一言答へた。

「そんな事いつて、一寸二階へ行つてどこが野良猫みた様(よう)だか見ていらつしやい。まあ、とに角、こんな夜更けに、あの子達を追出すなんて事は、神様

にすまないわけです。神様が、私達にッて、定めな
すつた仕事なら、何とかして果さなくツちや。」

「もつと別の仕事の方がいゝ。」

「それは、そうです！ 誰だつて、自分の好きな仕
事をしたと思ひますさ。でも、自分達がしたい
と思ふ事をするのぢや、神様の課しなざる仕事と
はいへないわけです——あら！ 何の音でせう。」

錫の鍊が落ちる音がした。お崎は、その原因を
調べに飛んでいつた。十分程して、以前より、も
つと、暑さうな顔をして、戻つて来て、再、揺り
椅子に腰を下ろした。

「あの犬のお蔭で、驅けまはらせられてさ！ あ
いつが、物置の中で、ガリ／＼バリ／＼やるから
仕方なしに、薪置場へ入れたんですよ。さうした
ら、あそこに置いてある臺に登つて、頂邊にある
小窓を押し明けて、牛乳鍋の載せてある棚の上に
降りて、鍋をみんな落として、トマトの罐をみんな

な、ひつくりかへてしまつたんです。それでゐて
どこに居るのだから、姿がちつとも見えないと思つ
たら、床に泥の跡が付いてゐたので分つたんです
が、蚊除けの網戸を蹴き／＼通り抜けて、家の中
に入つたんです。それからとは、何處にゐるか
大抵想像がつかますわね。二階ヘソツといつてみ
ると、案のじようあの子供達二人の間に、ちんと
納まつて、眠つてゐるぢやありませんか。私が入
つていつたら、海賊みたいな聲を出して、駢をかい
てゐたのですがね、燈火を點けて、寢臺のところに
立つて見てゐたら、あいつ、眼を大きく明いてゐる
んですもの。眠むつてゐる振りをしてゐれば、そ
のまゝにして置いて貰へるかと思つたんでせう。
私は、ぐいと引張つて、連れ出して、古い鶏小屋へ
入れて置きましたから、朝まで、そこに居るでせ
う。ほんとの血續きでも何でもないのに、あの男
の子と赤ん坊みたように、あんなにも仲の良い同
士を、私や、見た事がありませんよ。」(つづく)